

すなわちこれは、「恐れ多くも神さまが我らと共に
におわします」との意でござる。

24 ヨセフは夢から覚めるや、我らが御あるじなる
神さまのみ使いに言われた通り、マリヤを妻に迎え
たのでござるが、25 男のお子が生まれるまでは、妻
と枕を交わすことはござらなんだ。かくて、そのお
子のお名をイエホシューアとおつけ申した。

とは言え、このお子は後に天離るガリラヤ
の舌訛みたる鄙にてお育ち遊ばされしほど
にイエホシューアさまと呼ばれることなく、
かの地の訛りにてイエシュアさまとは呼ばれ
ることと相なったのでござる。

●第二章

三 星占い師、来る

「イエシュアさまは、①ヘロデ王の御代にユダヤ
の国はベツレヘムなる村にてお生れなされてござる。

その頃、御覧あれ、②星を読む占い師どもが東の
方より③ヒエロソリユマ（イエルサレムの雅名）の都に

やつて来て、2 申すには、

「ユダヤ人を取り仕切るべくお生まれなされたお方
は何処におわしましょうや？ やつがれどもはめで
たき徴の星の空に昇るを見て、そのお方を拝みに
参上致してござりまする。」

3 これを聞いたヘロデ王は怖気を震い、

心の中でこう思った。

「余こそこの国のあるじたるに、かかる
曲事を申すとは不埒千万。さては余が御位

を窺^{うかが}う曲^{くせ}者の生まれたるよな、近頃^{せいよう}世上にかまびすしきお助けさまなる者の現われ、この国を覆^{くつがえ}し、新しき世を作るべしというは、さだめしこの者のことならん。」ユダヤの国は四隣^{しりん}をローマ帝国に囲まれ、その属国となつて命脈^{めいみやく}を保つていたのでござる。その中であつて、国民の中には二つの勢力がござつた。

一つは、国を開いて異国の人々とその文物、宗教までも取り入れて、国の富強^{はか}を図ろうとする開明開国派^{みかど}の王とその臣下。

また一つは、古来の仕来^{しき}たりを守り、祖国から穢^{けが}らわしい夷狄^{えびす}を駆逐^{くそく}しようとする下々の敬神攘夷^{けいしんじやうい}の輩^ら。その主流が①フアリサイ衆とその旗頭^{はしら}たる②掟語^{おきてご}り衆、荒野^{あれ}野にあつて厳しい修業^{しゆぎ}に明け暮れる③エッセネ衆、そして隙^{すき}あらばと牙^{さば}を研ぐ熱烈攘夷党の一揆^{いっぎ}。

この二派の間に、心は攘夷ながら権力にお

もねる二股膏藥^{ふたまたこうやく}、大祭司^{おほのかんさき}とその一党たる④サドカイ衆、祭司衆。

二派は互いに対立し、ガリラヤに盤踞^{ばんきよ}する熱烈攘夷党はしばしば蜂起^{ほうき}し夷狄^{えびす}の残虐^{ざんぎやく}な介入のもととなつてきたのでござる。この者どもが奉ずるのは、天から遣^{つか}わされるお助けさまが民を救い、新しい世を作るという古き言い伝えてござつた。されば、王は心中に不安を禁^{かぎ}じ得なかつたのでござつたが、

ヒエロソリユマの衆もまた皆同じ思いに驅^かられていたものでござつた。

④そこで王はその臣下たる民の中から祭司の頭^{かしら}どもや掟語^{おきてご}り衆をことごとく御前^{みまへ}に召し集め、幾度^{いくたび}も繰り返してこのように聞き糺^{ただ}した。

「世に言うお助けさまなる者は、そも、何処^{いずく}に生まるるや？」

⑤そこでこの者らが畏^{かしこ}みて申すには、

「殿下^{でんか}」それは「定めし」ユダの地ベツレヘムで

ござりましょう。いにしえの御言持ちの聖がこのように書き記しておりますれば。

『①6 ユダの国なるベツレヘム。

汝はユダの頭どもの中で

最も下座にあるべき者にはあらず。

すなわち、

汝がうちより一人の頭現われ、

② 我が民イスラエルをば導かん。』

7 そこでヘロデ王は、星占い師どもをひそかに召

し、その星の現われたのはいつのことであつたかと、つぶさに聞き糺した。

8 その後、この占い師どもをベツレヘムへ送り出すとして、宣つには、

「其の方ども、行きて、草の根分けてもその童をお探し申せ。お見つけ申し次第、余に伝えよ。自らも参りて、拝み申したきものなれば。」

9 占い師どもは王の言葉を畏み承り、再び旅

に発ち申した。すると、御覽あれ、東の方で見たあの星が先に立つて進み、その幼い人のいなさる所の真上に止まった。⑩ 占い師どもは、その星を見て、大喜びに喜び申した。

⑪ そこで、その家を訪い、中に入つてみたところ、母御前のマリアと共にござる赤子が目にとまつた。占い師どもは、「これこそが探し求めたお方に相違あるまじ、」あなありがたや尊やな!」と、その場にガバと膝をつき、その幼子をば伏し拝み、「携えて来た」宝の箱を開けて、⑬ 黄金と乳香(芳香樹脂)と没薬(薬物の妙薬)をお捧げ申した。

⑫ ところが「その夜」、占い師どもは、「ヘロデが許へは帰るなかれ」と、夢に「み使いの」お告げを受け、「かくてはならじと」別の街道をたどり、故国へ戻つて行つたのでござつた。

四・エジプトへ逃げる

⑬ 星占い師どもの去つた後、御覽あれ、我らが御

になった。¹⁹ 夫ヨセフは正しい道をつらぬく人だったので、マリアのことを表ざたにするのをぞまず、ひそかに縁を切ろうと決心した。²⁰ ヨセフがそのような思いでいたとき、主の使いが夢にあらわれて言った。「ダビデの子孫ヨセフ、妻マリアを迎え入れることを、おそれるな。マリアが身ごもったのは、聖霊によるのである。²¹ マリアは男の子を生む。その子をイエス(救い主)と名づけなさい。その方が民を道のあやまりから救われるからである」。²² このことはすべて、主が預言者をつうじて言われていたことが実現するために、起こったのである。

²³ 『見よ、おとめが子をやどし、男の子を生む。』

人はその子をインマヌエルと名づける』(イザヤ7・14)

これは「神はわれわれとともに」という意味である。²⁴ ヨセフは眠りから覚めると、主の使いが命じたとおり実行した。妻を迎え入れ、²⁵ 男の子が生まれるまで、妻との交わりをもつことはなかった。そして、その子をイエスと名づけた。

最初の訪問者は、貧しい不毛の「東の地」からの占い師

2

イエスは、ヘロデ王の時代に、ユダヤのベツレヘムで生まれた。ちょうどそのころ、東のほうから占い師たちがエルサレムにやって来て、² 「お生まれになったユ

ダヤ人の王は、どこにおられるのか。わたしたちは東の地で、その方の星を見たので、おがみに来た」と言っていた。これを聞いて、ヘロデ王は不安にかられた。王の側に立つエルサレムの人々もみな、同じであった。王は民の大祭司たち律法学者たちを全員集めて、「キリスト」はどこに生まれることになっているかを問いただした。

かれらはこう言った。「ユダヤのベツレヘムです。預言者によってこう書かれています。

『ユダの地、ベツレヘムよ、

おまえはユダの指導者たちの中で

いちばん小さくされたもの』ではないか。(ミカ5・1)

『おまえの中から指導者があらわれ、

わたしの民イスラエルを牧するのだ』。(サム下5・2)

そこで、ヘロデは占い師たちをひそかに呼びよせ、星のあらわれた時期をたしかめた。そして、かれらをベツレヘムに送りだすにあたって、こう言った。「行って、その子のことをくわしく調べ、見つけたら知らせてくれ。わたしも行つて、おがもう」。かれらは王の言いつけを聞いて出かけた。すると、東の地で見たあの星がかれらを先導し、幼子のいる場所の上に来て、とまった。かれらはその星を見て、喜びにあふれた。かれらはその家に入って、母親のマリアとともにいる幼子を見ると、ひれ伏しておがみ、自

分たちの宝物たからものをひらいて、贈り物おくりものとして黄金おうごんと乳香にゅうこうと没薬もつやくをささげた。12 そしてかれらは、「ヘロデのところへ帰るな」と夢でお告げを受けたので、べつの道みちを通とおって自分たちのところへ帰っていった。

幼子おさなごイエス、マリア、ヨセフ、「難民なんみん」としてエジプトに避難ひなん

13 占い師たちが帰ると、主の使いが夢でヨセフにあらわれて、言った。「起きて、幼子とその母親をつれて、エジプトに逃にげ、わたしが告げるまで、そこにいなさい。ヘロデがこの幼子をさがして、殺ころそうとしているからだ」。14 ヨセフは起きて、夜のうちに、幼子とその母親をつれてエジプトに発たった。15 そして、ヘロデが死ぬまで、そこにいた。これは、主が預言者よげんしやの口をおして『わたしは、エジプトからわたしの子呼び出した』（ホセア 11・1）と言われたことを、実現させるためである。

幼子イエスの抹殺まっさつをもくろむヘロデ、幼児ようじを無差別虐殺むさべつぎやくさつ

16 さて、ヘロデは占い師たちにだまされたと知って、ひじょうに憤りいきどお、人を送おくって、占い師たちにたしかめておいた時期じきにもとづいて、ベツレヘムとその周辺しゅうへん一帯いったいの二才にさい以下以下の男の子を、一人のこらず殺させた。17 こうして、預言者エレミヤによって告げられて

いたことが実現した。

18 ラマで声が聞こえた。

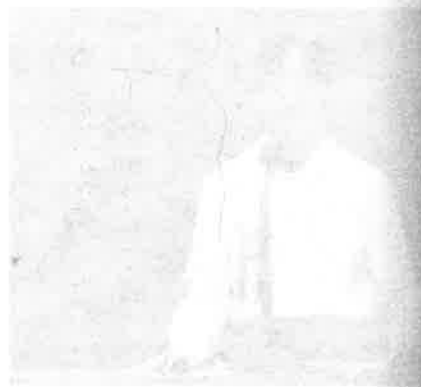
はげしく泣き悲しむ声だ。

ラケルは自分の子どもたちのことで泣き、
慰められることをこぼんだ、

子どもたちはもういないのだから。(エレミヤ 31・15)

エジプトから、世の民(異邦人)の地ガリラヤへ

19 ヘロデが死ぬと、主の使いがエジプトにいるヨセフの夢にあらわれて、²⁰言った。「起きて、¹⁹幼子とその母親をつれ、イスラエルの地に行きなさい。この幼子のいのちをねらっていた者たちは死んだ」。21そこで、ヨセフは起きて、幼子とその母親をつれて、イスラエルの地に入った。22しかし、アルケラオが父ヘロデのあとをついでユダヤの王になって、いることを聞き、そこに行くことをおそれた。そして夢で示しをうけて、ガリラヤ地方に向かい、²³ナザレという町に行つて住んだ。こうして、「その方はナザレの人と呼ばれる」と預言者たちによって言われていたことが、実現した。



賢者の訪問

(マタイ福音書二章一一二節)

イエスは、ヘロデ王のとき、ユダヤの地でお生まれになった、ところで東方の賢者たちがエルサレムにやって来て、言った。「お生まれになったばかりのユダヤの王さまは何処においでになるのですか？ われわれは東方にその方の星が昇るのを見て、拝礼するために参りました」。

私たちは聖堂に居た。私は前向きとして、「ヘロデ王のとき」というこの言葉が私たちに教えているのは、イエスが独裁者の治下に生まれたということだと言った。ニカラグアに三人のソモサがいるのとまったく同じように、当時、三人のヘロデが居た。イエスが生まれた時代には、老ヘロデは彼の息子たちのうち二人を、その陰謀を恐れて絞殺している。彼の妻たちのうちのひとりをも、彼は殺させているんだ。またイエスの誕生当時、彼は三百人の役人を殺害している。同様に陰謀を恐れたんだ。イエスは迫害と恐怖政治の時代に生まれて来たんだ。人々は、約束された救世主^{メシア}が王になることを知っていた。だから賢者たちはユダヤの王に、救世主^{メシア}という言葉は何を意味しているのかを尋ねたんだね。この《賢者たち》というのは、僧職者であることが多く、時には王であることもあったが、主に、

とくに天文学にたずさわっている哲学者や学者だったのではないだろうか。彼らは同時に宗教的な教理、ゾロアスターの教理を拡めて歩いていた。彼らが話している流れ星というのは、当時ちょうど地球に近づいていた、コホーテク星のような流れ星だったんだろう。キリストの誕生の時には大きな流星、ハレー彗星が見えたことが知られているんだ。あるいはまた、天に何か他の現象があらわれたってこともあるし、あるいはこれは、東方の人々が好んで用いる言葉の綾にすぎないのかも知れない。人々は救世主を星になぞらえた。マタイ福音書のこの物語は、フィクションである可能性もあるね。するとこれは事件の小説的な描写ということになる。しかしだからと言って、この章が真実ではないということにはならない。

ラウレアノが言った。——僕が思うに、この賢者たちは、ヘロデに解放者の所在を尋ねた時に、機嫌をそこねたんじゃないだろうか。それは、今だって外国から来た誰かが、ソモサにニカラグアの解放者に何処で会えるか、と尋ねるのと同じことではないのか？

青年たちのうちの他のひとり。——むしろ僕には、この賢者たちはヘロデを怖がっていて、ヘロデの承諾なしには何もしようと思わなかった、というふうに思えるんだけど。

トマス・ペーニア この人たちやあ、通行許可証みたいなものを欲しいと思ったんじゃないんですか……

同じ青年。——彼らが真先にヘロデの所へ行ったのは、彼らが恐れていたからなんだ。そしてエルサレム中の人々だって皆、彼らが救世主について語るのを聞いた時には、不安になったんだ。それは

ニカラグアの人たちが、解放について何かを聞くやいなや怖くなるのとまったく同じことなんだ。つまり彼らは、搾取されている人々を解放しようと思う者が居るなんてことは、ほとんど聞こうともしないで、震え始めるんだ。こんな政府は打ち倒さなければならぬなんて聞こうものなら、恐ろしくて、震え出すんだ。

アダーン 僕はこう思うんだ。この賢者たちは、救世主はヘロデの家に属するんじゃないかって考えて、それでヘロデからその誕生の情報を得ようとした。救世主が王であるとしたら、彼らが救世主を宮廷内に探そうとしたことも、至極、当然なことだからね。しかしこの宮廷では、腐敗と悪徳の外は何も君臨してはいなかった。だから救世主がそこに生まれるはずはなく、民衆のなかに、貧しく或る馬屋のなかで生まれることになったんだ。賢者たちは、救世主が宮廷内に生まれたのではないことを悟って、ひとつの教訓を得た。福音書では、さらに続いて、彼らが宮廷から出て再び星を仰いだことになっている。すなわち、その星はこの賢者たちをエルサレムに導いたわけではなく、彼らは一度、その星を見失っているんだ。

フェリクス 彼らは混乱していたんだ。きっと彼らは外国人だったために、この国の状況に関して正しい情報を与えられておらず、そこでまず最初に、新しい指導者のことをお上に尋ねるために、首都へ行った。

これを聞いてヘロデ王は、驚いた。エルサレムの人々として同じことだった。

オスカル　ヘロデがこの新しい王の誕生を聞いた時、彼は権力を譲り渡したくはなかったから、烈火のごとく怒ったわけだ。彼はきつとすでに、どうしたら、この新しい王を、ちょうど彼が他の多くの人々を片付けて来たように、取り除くことができるだろうかと考えていたに違いない。

バプロ　彼は憎しみと嫉妬を感じたんだ。独裁者というものは、いつも自分自身を神々のように感じるものなんだ。彼らは自分を唯一無二のものと信じているし、彼らよりまだ高い存在のものが存在するなんてことは、考えることができないんだ。この少し前に、ヘロデは多くの人々を殺害させている。そして、そこへ異国人たちがやって来て、新しい王、解放者の所在を尋ねている。

フェリクス　彼はきつと、すぐに自分の警察を呼んだんだ。僕は、この「彼はいたく驚き」という文章が意味しているのは、このことだと思う。

青年たちのうちの他のひとり。――さらに、エルサレムの人々はヘロデと共に驚いた、と言われている。これは明らかに、あのお偉方たち、ソモサ主義者とここで俺たちが呼んでいるような、ヘロデの信奉者のことを言っているんだ。そいつらにとっては、解放者の知らせはもちろん、いいことではなかった。しかし、貧乏人たちにとっては、よいものだった。権力者たちは、救世主が彼らに反対するものであることをとくに知っていたんだ。

トマス・ペーニア老人。――この何百万人て人間（当時の人口はどれ位だったんですか？）を情容赦なく治めていたこの王さまは、誰か或る人間が自分の氣に入らねえようなことを言うのを、我慢

したりはなさねえだ。みんなお上が決めたことをだけ考えてりゃあよくて、きっと救世主について話したりすることは禁止されていましただよ。だから、この異国人たちが、事実上は新しい統治についてについてしゃべったことは、スキヤンダルだったんでござえましよう。

マヌエル 民衆はもう長い間、この救世主を、あるいは解放者を待ち望んでいたんだ。その上、救世主の誕生がもうすでに外国にまで聴こえていたっていうのは、興味深いことだ。僕は、この賢者たちは、こんな噂をすぐに拡めてしまふ民衆を通して、このことを聞いたんだと思う。しかし、エルサレムの権力者たちは、まだまったくこのことについて予感さえしていなかったんだね。

そこでヘロデは祭司長と律法学者たちを呼び集めさせ、キリストは何処で生まれることになっているかを、彼らから調査した。

私は言った。——これらの人々は、聖書についての優れた有識者だった。彼らは、救世主^{メシア}がこの国のベツレヘムに生まれるはずだということを知っていたんだよ。

ドン・ホセが言った。——救世主^{メシア}がその村に生まれることになっているというのを、彼らは知っていたけれど、自分たち自身はエルサレムの金持や権力者たちのもとにとどまり、宮廷に出入りしていた。今日だって、イエスがベツレヘムで貧しく生まれたことを、はつきりと知っていながら、高位聖職者なんでものが居るんだから。毎年毎年、彼らは新たにイエスの誕生について説教するんだが、

彼ら自身は金持たちとだけ往き来しているんだ。

それからヘロデは、ひそかに賢者たちを呼び、星の現われた時のことを聞きだした。その後、ヘロデは彼らにベツレヘムの方向を示して言った。「行って、その子のことをよく聞きだして、わたしもまた出かけて行って、その子を拝めるように、わたしに知らせてくれ」。

レベーカー ヘロデは、その子が、ここ、ソレンチナーメとまったく同じような、だからあまり重要でもない小さな村に生まれたことを聞いたのね。だから彼はこの賢者たちに、彼らがその子供を見つけたら知らせるように頼んだんだわ。どうしてって、ヘロデは、救世主が大して重要でもない或る村で、誰か或る貧しい女の子として生まれて来たとしたら、その他にこの救世主について知る方便がなかったからなのよ、ね？ この辺りの人々は明らかに、みんなこのことについてもう知っていたというのに。

彼らが星を再び見上げたとき、多いに喜んでその家に入って見ると、子供が母のマリアと一緒においでになった。そこで彼らは膝を折って礼拝した。それから彼らはその宝箱たからばこを開け、黄金と乳香と没薬もくやくをその子供に贈った。

トマス 彼らは行き着いて、贈り物を開けましただ。それは少しばかりの香料と金のつまった小袋、二、三個だった。それはそんなに大した贈り物のようには見えなかったでござえましょう。どうしてかって、この異国人たちは、きつとイエスさまに金一杯に詰まった大きな袋や、山のようにたくさんのお札、そうでなければ、この人たちがそのとき持っていた大したものを運んで来ることもできましたでしょうがな。しかし、実際には、この人たちは、ほんとに慎ましい贈り物をしました。儂らもそんなふうに、幼児イエスの秣槽えさどけに行くべきなのでしょうが。貧しく、謙遜に、あるがままに。少なくとも儂はそう思いますだ。

オリヴィア 東方から来たこの賢者たちの贈り物に因ちなんで、今日、クリスマスには裕福な人たちは互いに贈り物をし合うわね。だけどそれは、ただ彼らの間でだけなのよ。

マルセリーノ この時期、町の店先はクリスマスの贈り物であふれている。商人は大したお金を儲けるわけだ。だが、そんなことは幼児がさなこイエスの祝祭でもなんでもない。むしろヘロデの子孫の祝祭なんだ。

そして神が夢のなかで彼らに、再びヘロデの所に行つてはならないと命じたので、他の道をとつて故国へ帰って行った。

トマス この賢者たちは、他の道を通つて帰つたんだ。イエスが彼らを照らし、そして彼らがへ

ロデにイエスのことを話さないようにした。もう子供のころからイエスは、迫害された人だったんだ。イエスが賢者たちに、出来たら他の道を通って帰った方がいいと教えられたんでござえますよ。こうして、賢者たちはイエスを、その敵から守られたんでしょうが。

フェリペ　彼ら自身も追われていた。この他の道というのは、一種の逃亡なんだ。もし、彼らが再び首都に戻っていたら、ヘロデは彼らを殺させていただろう。

アレファンドロ　解放者は迫害と追跡にみちた体制下に生まれて来て、彼を見た人も皆、自動的に追われる者となる。

アレファンドロの母オリヴィア　もう母親の胎内にいらしたところから、イエスさまは金持たちには反対していらした。マリアさまは違うところで、御自分の御子が権力者をその王座から引きずり下ろし、貧しい人々をよきもので満たして下さる、と言っておいでになるでしょ。イエスさまはお生まれになるやいなや、追跡され、マリアさまは御子と一緒に逃げなければならなかった。父親だって同じことよ。

グローリア　民衆出身の人々は、とうとう希望を汲みあげたんです。ようやくにしてイエスさまがお生まれになったとき、この人たちはとても喜んだんだわ。辺りの人々は皆、もうこのことを知っていました。この星というのは、もしかするとイエス御降誕の噂のことで、それは異国の賢者たちの耳にまで達するほどだったのよ。

トマスがその偉大な単純さで。——それは恐らく、多かれ少なかれそんなことだろうて。まった

く正確ってわけじゃないけど、まあまああってところだ。僕らが、ひとりの坊さんがソレンチナーメへやって来るようになったと聞いた時にゃあ、嬉しかったですもんなあ。そこで僕らは考えましただよ。ひとりの坊さんが来てくださりゃあ、ひとつの御聖堂^{キリシタン}が立って、みんな違ってくるんだ、よくなるんだって考えましただよ。僕は信じてますだ。みんながそれを楽しみに待ってましただ。とにもかくにも僕は、とうとう僕らの島にもひとりの坊さんがいることになったぞって喜びましただ。まあ、あん時もこんな具合でござえましただよ。この御子とともにすべてが変わっちまうってんですからねえ。

チャエル この賢者たちは、彼らが勘定に入れていなかったような、あることに出会った。つまり、解放者というのはひとりの貧しい子供で、さらにその上、追われているということだ。

ラウレアノ この御子を追跡しているのは、権力の座にすわっている人間たちだということだね。そして解放者の典型というのは、すべてを変革したいと欲し、すべての人々を平等にして、貧しい者たちを解放し、権力者たちから、その特権を奪い取るということなんだから……権力者たちが解放者を追い、殺してしまいたいと思うのも、必然性のあることなんだ。